

V-38

高強度コンクリートと自然石のフラクチャープロセスゾーン性状に

関する実験的研究

東北学院大学工学部 学 生 員 ○齋藤 広忠
東北学院大学工学部 フェロー会員 大塚 浩司
東北学院大学工学部 正 会 員 武田 三弘
東北学院大学大学院 学 生 員 遠藤 博一

1. まえがき

コンクリート強度の増加に伴って、その引張り破壊時に発生するフラクチャープロセスゾーンの性状が変化することが明らかにされている。しかし、その性状は、非常に複雑であり、これを直接的、可視的に調べる研究は少なく、未だ十分に解明されていない。

本研究は、高強度のコンクリートと自然石とを用い、AE 法及び X 線造影撮影法を同時に同一供試体に適用することにより、引張応力の作用下で両者に生じるフラクチャープロセスゾーンを非破壊的に検出し、その性状を解明、比較することを目的としたものである。

2. 実験方法

実験で用いたセメントは、早強ポルトランドセメントである。細骨材として川砂、粗骨材は最大寸法 20mm の砕石を使用した。コンクリートの配合は、目標圧縮強度が 80、100、120N/mm² の高強度コンクリートになるようにした。自然石は花崗岩の白御影石 123N/mm² を使用した。

図-1 は供試体形状を示したものである。実験には、コンクリート、自然石共に寸法 175×175×80mm のコンパクトテンション型供試体を使用し、供試体には初期ひび割れを導くための幅 3mm のノッチを設けた。また、供試体には(a)に示すように AE 計測のためのセンサーを 6 個設置し、(b)には X 線造影撮影のための造影剤注入方法を示す。

図-2 は実験装置概要を示したものである。載荷方法は、引張載荷装置に供試体を設置し、ロードセル及びクリップゲージを取り付け、荷重とひび割れ開口変位をデータロガーにより測定した。AE 計測条件は、しきい値 45dB、増幅度はブリアンプで 40dB、センサーの共振周波数は 140kHz とした。X 線撮影条件は、出力 100kV、2mA、焦点距離を 600mm とした。

3. 実験結果および考察

図-3 は実験結果より得られた荷重-開口変位曲線を示している。最大荷重点(Pmax)、最大荷重後 70% 荷重点(0.7Pmax)、最大荷重後 30% 荷重点(0.3Pmax)、及び終局点で X 線造影撮影、AE 三次元位置標定結果の集計を行った。

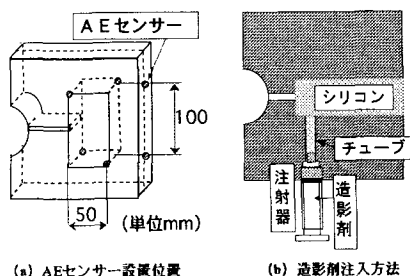


図-1 供試体形状

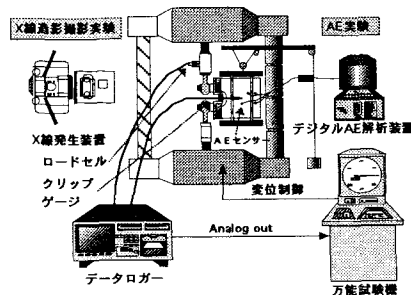


図-2 実験装置概要図

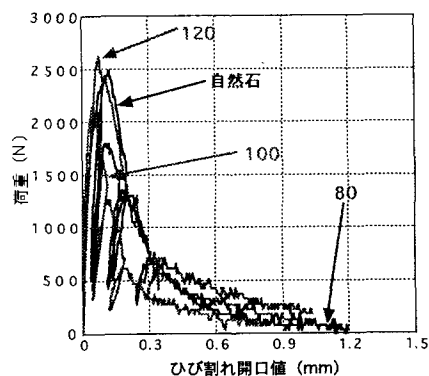


図-3 荷重-開口変位曲線

図-4 は、Pmax までに発生した AE 領域を AE エネルギーの大きさに 3 段階に分け、それぞれの最外側領域のトレース図を模式的に示し、重ね合わせたものである。ここで、AE エネルギーは、AE 波形パケットの持続時間にわたって信号電圧の 2 乗を積分して規格抵抗値で除する結果で、単位は aJ である。この等高線状の模式図は、外側から順にエネルギーの大きさが 1.0×10^3 aJ 未満、 1.0×10^3 aJ 以上 1.0×10^4 aJ 未満、 1.0×10^4 aJ 以上を表している。この図に見られるように AE イベントはエネルギーが大きくなるほど、ノッチ先端部の狭い範囲に集中する傾向がある。そこで本研究では、エネルギーが低い AE イベントは、コンクリートの破壊に直接関係しないものと考え、エネルギー総和の 95% に相当する AE イベントを破壊形成に影響を及ぼす AE イベントと定義した。AE イベント集合の外側を線で結んだ領域を AE 有効発生領域とし、この AE 有効発生領域の長さ及び幅を求め、コンクリート及び自然石のフラクチャープロセスゾーン性状を調べた。

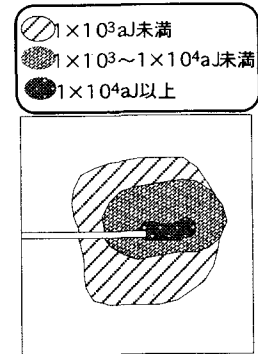


図-4 AE エネルギー性状

図-5 は、最大荷重 (Pmax) 時におけるコンクリート及び白御影石の X 線フィルム及び X 線フィルムトレース図、AE イベントと AE 有効発生領域の一例を正面図、側面図、上面図に示したものである。

このフィルムからひび割れ及びひび割れ周辺近傍の雲状領域をトレースし、フラクチャープロセスゾーンの長さおよび幅を求め、コンクリート及び自然石のフラクチャープロセスゾーンの性状を調べた。

両者の破壊プロセスゾーンを比較すると、高強度のコンクリートに比べ、自然石のほうがフラクチャープロセスゾーンの長さ、幅共に小さくなる傾向が見られた。コンクリートには圧縮強度が大きくなると骨材とセメントペーストとの付着強度も強くなり、骨材を迂回していたひび割れが骨材を貫通して進展し、荷重段階が大きくなるまで、ひび割れが発生せず、フラクチャープロセスゾーンの発生が抑えられる傾向がある。また、より圧縮強度の高い自然石はさらにフラクチャープロセスゾーンの発生が抑えられたと考えられる。

4. まとめ

本実験の範囲内で次の事が言える。

- 1) コンクリート及び白御影石において、AE 法、X 線造影撮影法を同一供試体に行い、フラクチャープロセスゾーンを非破壊的に検出することができた。
- 2) Pmax 時では 120N/mm^2 コンクリート供試体の方が自然石供試体よりも、フラクチャープロセスゾーン長さはやや長く、幅はやや広がる傾向が見られた。

謝辞

本実験の実施に際し、東北学院大学工学土木工学科平成16年度大塚・武田研究室生、飯塚裕久氏の協力を受けた。ここに謝意を表する。

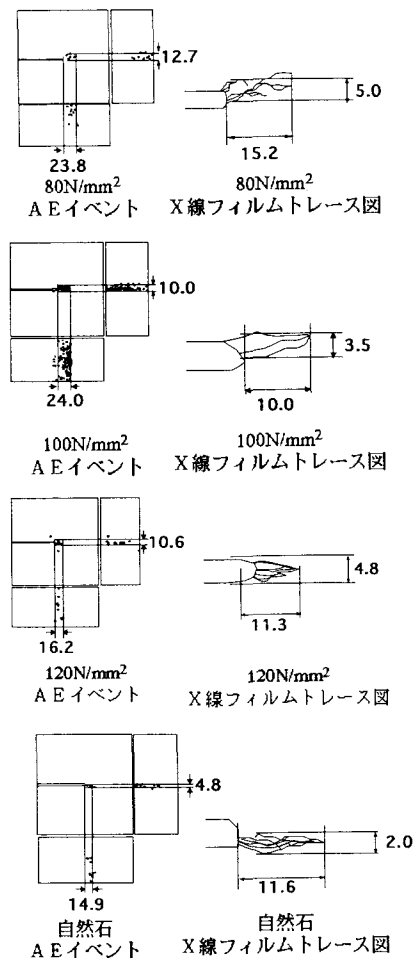


図-5 AE 有効発生領域及び X 線フィルムトレース図